64　終戦前後の日本医学会

○渋谷　鉱・谷津　三雄

一、第十一回日本医学会

中野操著『日本医事大年表』に「第十一回日本医学会の講演において日本語以外は用いないように意見の一致を見たので、この旨副会頭宮川米次に進言す。昭和十七年三月二十六日から三十日までに東京において開催。分科三十五。参加会員数六千名。会頭長与又郎は昨年死去のため副会頭宮川米次。準備委員長東龍太郎により運営」とある。

この昭和十七年三月に行われた第十一回日本医学会がその学会会誌を刊行したのが、昭和十九年七月三十日であった。その目次の左上隅に「注意：本会誌ハ完成ノ上ハ六七七頁トナルベキ予定ナルモ用紙ノ都合上一～四六〇頁ヲ「其ノ一」トシテ仮製頒布ス。近ク四六一～六七七頁ヲ「其ノ二」トシテ頒布スル予定ナリ（昭和十九年六月）」と添付されている。

昭和二十年三月十日は東京大空襲で、次いで十四日は大阪大空襲、四月一日米軍沖縄に上陸、五月四日ベルリン陥落、八日ドイツ無条件降伏、次いで八月十五日終戦を迎え、国民生活は混乱と虚脱に陥り、極度の窮乏生活にあえいでいた。したがって、このような状況下では、『第十一回日本医学会誌』の「其ノ二」は刊行されなかった。したがって、第二十一部消化器病学から第三十五部医科器械学の内容は第十一回日本医学会会誌「其ノ一」からは知ることができない。そこで『第十一回日本医学会要覧』（昭和十七年三月二十六日発行、発行者兼編輯は東龍太郎で全二五頁）を参考資料とし、戦前最後の日本医学会の内容について述べたい。なお、本学会の総会演説は山崎佐による「日本医道と医学及外教（仏教、儒教、基教）との関係」であった。第一部医史学は藤浪剛一が分科会長で十五題の発表がみられた。

二、第十二回日本医学会

終戦と同時に軍需工場はいっせいに首切りを行い、また、復員軍人や外地からの引揚者を加えて一千万人が失業、食糧配給制度は崩壊し、買い出しは盛んとなるなど、急角度で上昇するインフレの嵐の中で、昭和二十二年四月一～七日戦後初めての第十二回日本医学会が大阪で開催された。

『第十二回日本医学会会誌』の準備記事によると、「第十一回日本医学会総会に於て次回開催地を大阪市と決定し、会頭楠本長三郎、副会頭佐谷有吉両名の推薦を見、さらに昭和十七年五月大阪帝国大学教授岡川正之君を準備委員長に推薦し、その具体的準備に着手したが、昭和二十一年十一月十六日岡川正之が急逝したため昭和二十一年十二月十五日大阪大学医学部長吉松信宝氏が準備委員長となった。また、十二月六日に会頭楠本長三郎も他界するなか行われた。

本来なら第十二回総会は昭和二十一年四月に開催することになっていたものが図らずも終戦となり、未曽有の社会混乱を来たしているを以て其開催を一ヵ年延期して行われたものである。副会頭佐谷有吉の開会の辞に「第十二回日本医学会を開催するに当り我国は現下敗戦の結果連合軍の占領下により不安なる人心と困窮せる国情との裡に本総会を開くことに相成った次第でありまして之を曽て過去十一回の総会に於て絢爛たる科学の殿堂に進歩と発達を誇る我医学業績を満喫した歴史を回顧対比しますると感慨無量と云ふ外言葉もない次第であります。交通宿舎食糧其他凡ゆる方面に於て欠乏と不便とが山積せる事態にも拘らず斯かも多数の会員各位の参集を得ましたことは皆様の医学研究に対する熱意の旺盛なることを物語る事実であり…殊に本会にとりまして光栄に堪えないのは連合軍最高司令部当局の好意によりまして公衆衛生福祉局長サムス大佐以下十数名のアメリカ外賓を迎えましたことで、本会に錦上華を添へたる観あり、誠に感謝に堪へず会員諸君と共に衷心より歓迎申上げる次第であります」から、当時を偲ぶことができる。

第一分科の医史学は分科会長山崎佐で、大矢全節、大鳥蘭三郎、石原明、佐伯理一郎、中野操、山形敞一、小川鼎三、水田昌二郎、王丸勇、三木栄らの発表がみられる。

（日本大学松戸歯学部）